

一、淋疾ににんどう一分、ばべん草一分、わうれん一分、紅の花五厘、ういきよう二分。

右袋へ入、猪口に水を沸し能く振出し、手引かけんにして洗ふべし。口中の痛に含て妙也。其外何れの痛にも吉と云。

一、癰疽ヒヤウに鱈ヒヤウをすり、砂糖に合せ、竹筒に入れ、痛む指を漬くべし。

一、口中血うづきの藥、男松の葉百筋、山椒三匁、塩三匁、水茶碗に二盃入れ、さわくと煎出し含む。

一、しやくり止らざるに、龍眼肉の上の皮を焼て嗅げば止む。鼻血にも宜と云。

一、長壽秘藥の處方

當主去年葛西へ御放鷹の節、八十有餘の老農甚しく農事に壯健也。召て年を御尋あれば八十五歳といふ。父をとへば九十五にて、天年を終ふといふ。平生をとふに病苦ある事なし。何とぞ保養のしるしもありやと問はしむ。世々一方の藥餌有て嘗之といふ。其方は大蒜一升、氷砂糖一斤、三年を経たる味噌一升を、三年の好酒を以て搗交て泥とし、壺

に入れ梅の樹の下に埋置。或は夏の土用の前に埋めば、翌年正月以後取出し、或は冬大寒の前に埋めば、翌年七月以後取出して用るといふ。圖書神田氏話

戸倉善佐云。酒はすくなく入てよし、多く入るればじるに成てあしく候。

一、薰 臍 法

唐鳥頭兩頭を以て好とす。若しなれば、頭の尖たるを用ふ。 青塩 蝦鼠糞 浚藥 乳香

右五味 各一匁 麝香二分五厘

右大味皆細末

蕃粉を丸くし平めにして厚さ三分、大き一寸二三分、中の穴は小指の大きなり。穴の内へ右粉藥をいづばい入れ、その上に槐樹の皮の、上皮下皮をこそげ、是を敷て灸三壯づつにて取代る。但皮の厚きはあし。年の八月十五日にすゑそめて、我年の數ほど三日めくにする。腹の鳴を以て好とし止む。當病には時月に不拘。

一、癩風の妙藥

貝母を粉にして絹の袋に入、酢にて摺附る。但行水の後其所をこくり、其跡へ摺付る也。

一、雪やけ并あざの妙藥

青がへる生ながら腹にて、其所を幾度も摺て、かへるの腹の黒くなる時、そのかへる水へ放ち、やがてそのかへる死すれば宜しくなる也。幾度もかへて摺ること也。

一、淋病并しやうかちの妙藥

竊砂四錢 甘草五分 丁子壹分

右三味調合して二貼に分つ。一番は水三碗を二碗に煎じ、二番は水三碗を一碗半に煎じ服す。上原家傳

一、越中の今江村

越中泊町の邊に今江村といふ村あり。八百石許の所なり。

微妙公或時江戸より御歸藩の時、彼邊御通り地形等御覽候て、此所は新開出來可仕所と思召候、可致吟味と仰出さる。

山本清三郎など致吟味候處、七八百石許の田地出來可仕旨申に付、小松御城邊にて、健なる若き子供など多き村を撰び、男女共に可差遣旨御意に付、令僉議候處、御城下近き村の内今江村、若き者共多く候に付其段申上候へば、則今江村より遣候様に被仰出候。扱人數書上申以後、右の男女御覽被成候て、可被遣旨被仰出、御城御座鋪の庭に二三百

人許被召出、御座候間の障子品川左門明候て、越中へ罷越候者共と申上候へば、此者共御覽被成候事非別儀候。御城下近き所に罷在候者立離、御領内ながら四十里外へ罷越候間、不便に思召候。其故御覽被成候旨御意に候へば、右の者共承り二三百人の者忝がり、一同に聲を揚候て泣申候。則不殘越中へ罷越、新田出來仕候。能美郡今江村の出村故、越中にて今江村と申候。子々孫々、於今毎月十二日には村中致精進、家々綺麗なる茶椀を拵置、御茶湯を上申候。

此儀奥村重郎左衛門改作奉行にて、彼邊巡見の節承候に付、其近郷にて相尋候へば、成程其通にて、あの村は今以て毎月十二日には精進仕、御茶湯上申旨咄候由、奥村氏致物語候。山本話

一、理盡抄・賢愚抄の傳授

當時軍法を談するに、色々の流儀を立つれども、元と甲州流にてそれに和漢の辨を付け、偽りて流儀を立つ。左あれば日本に甲州流の外軍法なし。但太平記評判方といふもの、甲州をからず一流有之。其初を聞くに法華法印、肥前唐津に住居の時、太平記好きにて素讀をして、所の百姓など